

Toward a fully articulated network of cognitive structures for grammatical constructions : The case of constructions with kick/break-type verbs

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/5251

構文の認知構造ネットワークの精緻化

—kick/break 類動詞構文の場合—

中 村 芳 久

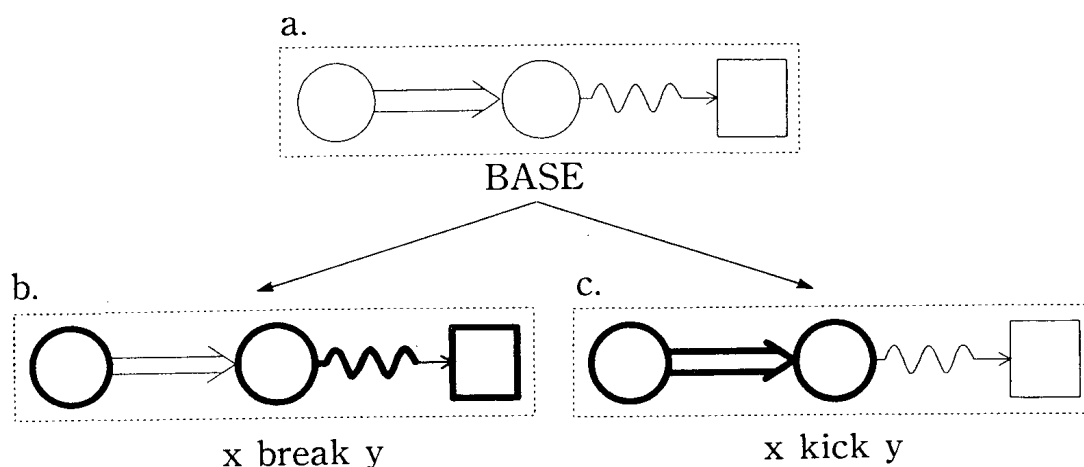
0. 序

中村（1993）において、構文の認知構造ネットワークの構築を試みた。すなわち、《使役》の認知構造をベースにして、そこから、x kick/break y 構文、have a V 構文、斜格目的語構文、結果構文、非能格構文、能格構文、中間構文、make 使役構文等の認知構造が放射状に拡張し、ネットワークを成すことを示した。しかし、その中心論点はネットワークの全体像の提示であったために、個々の構文とその関連構文の認知構造について詳細に検討するということが十分にはなされなかった。そこで小論では、上記構文のうち、kick/break 系動詞とそれに類する動詞系構文の認知構造について検討を深める。

1. 認知構造ネットワークのベースと kick/break の認知構造

まず、《使役》の認知構造と、その具現形である x break y 構文と x kick y 構文の認知構造、そしてこれら三者の相互関係は、イメージ図を用いて以下のように示される¹。

(1)



《使役》という事態は、一般に「あるモノが別のモノに力を加えて、後者を

変化させ、ある状態にする」ということである。そのイメージ図を表示する際に、あるモノが別のモノに力を加えるところを、左端の円からその右の円への二重線の矢印で示し、力を受けるモノが被る変化を波線の矢印で、変化後の状態を四角で示すと、(1)の上段にあるような《使役》の認知構造となる²。x kick y 構文と x break y 構文の認知構造は共に《使役》の認知構造をベースとするが、認知的際立ちの部分で対照的である。すなわち、kick 系動詞の構文 (eg. x kick y) は、x から y への力の加え方を描写するが、その結果 y がどう変化したかということについては言及しない。従って、その認知構造では、x, y に相当する2つの円と x から y への力の移動を表す二重線の矢印が太線で表わされ、変化の部分は細線で表される (下段右)。一方、break 系動詞の構文 (eg. x break y) は、x から y への力が加わったことを前提とし (その様態は描写せず)、結果的に y がどのような状態になったかを特定する。従って、その認知構造では、x と y を表す円と y の変化の部分 (波線矢印と四角) だけが太線で示される (下段左)。このように、これら2つの構文は、力の移動と変化の部分のいずれを特定するか、あるいは際立たせるかという点で、対照的であるが、この対照は、(1)のようなイメージ図によって明示することができる。

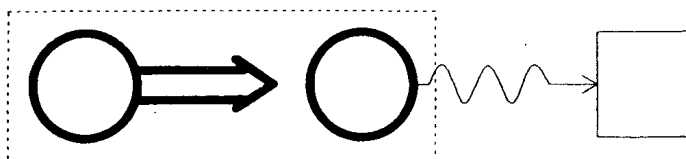
2. x touch y / x cut y 構文の認知構造

kick と break に類する動詞に、touch 系動詞、cut 系動詞がある。touch 系動詞は kick 系動詞に、cut 系動詞は break 系動詞により近い。しかし、次のような統語上の対比を見せる。

- (2) a. x kick at y.
b. *x touch at y.
- (3) a. *x break at y.
c. x cut at y.

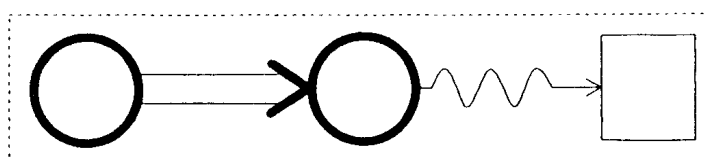
すなわち、kick は前置詞付目的語をとるが、touch はとらない。break は前置詞をとらないが、cut はとる。目的語に前置詞をとる構文 (斜格目的語構文, eg. x kick at y) が表すのは、x からの力が y に向けられたが、y に到達しなかった (当該行為が完遂されなかった) という事態であり、その認知構造は次のように表せる (中村1993: 255)。

(4) x kick at y

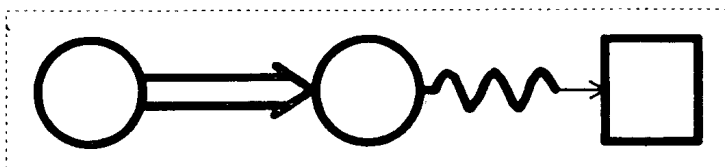


break 系動詞がこの構文に現れないのは(cf.3a), その動詞が, x の y への力の加え方を描写する動詞ではなく, この動詞によって「力を y に向けたが, 届かなかった」というような事態は表現できないためである。touch 系動詞もこの構文に現れないが(2b), それは, この種の動詞が接触のみを表現し, 接触までの動きを問題にしないためである。また, break と同じように結果状態を表す cut 系動詞が, この構文に現れ得るのは, 接触するまでの動きをも表すためである。以上を基に, x touch y, x cut y の認知構造を示すと, 以下のようになる。

(5) x touch y.



(6) x cut y.



認知構造(1)(b)(c), (5)~(6)はいずれも, x と y を際立たせるが, 力の移動や変化の部分の際立たせ方に違いがある。その違いは, kick が力の移動の部分の際立たせ, break が変化を, cut が力の移動と変化を, touch が接触を際立たせるという具合であり, 《使役》の認知構造の各部の際立たせ方の論理的可能性をほぼ尽くしていると言える。また, x kick at y のような構文は, さらに際立ちの可能な在り方を表現するために, 拡張した構文であると言える。これは, 新しい構文がむやみに拡張するのではなく, 妥当な認知上の要請にこたえる形で拡張するということを示唆している。

ここで各系の動詞の例を見ておこう。

- (7) kick 系動詞 : bash, beat, elbow, hit, poke, pound, punch, push, rap, slap, strike, tap, whack, etc.

touch 系動詞：contact, hug, pat, kiss, stroke, tickle, etc.

break 系動詞：crack, crumble, kill, open, rip, shatter, snap, split, etc.

cut 系動詞：chip, chop, hack, saw, scratch, slash, etc.

(cf. Levin 1993 : 7)

すでに気づかれているように、(1)(b)(c)にある x kick/x break y の認知構造、(5)(6)の x touch y, x cut y の認知構造は、特定の動詞が現れた場合の認知構造ではない。例えば、(1)の x kick y に付与された認知構造は、kick という特定の動詞が用いられた構文の認知構造ではなく、kick 系動詞が x verb y 構文に現れた場合すべてに共通する、いわばスキーマ的な認知構造である。以後、小論で図示する認知構造は基本的にはそのようなスキーマ的認知構造である。

3. 認知構造と文法的振る舞い

上に挙げたような x kick/touch/break/cut y の認知構造を仮定することによって、各系の動詞の統語的振る舞いを予測することが可能となり、またその理由も自然に理解できる。例えば、have a V 構文 (eg. x have a kick of y) の認知構造では、y の変化は際立ちもなく、認知スコープ内にもない(中村 1993 : 255)。この認知構造と各動詞系の認知構造を突き合わせると、どの動詞がこの構文に現れ、どの動詞が現れないかを予測することができる。つまり、touch 系動詞は、もともと y に変化を与えるほどの力の移動を表す動詞ではなく、x touch y 構文自体が x have a touch of y 構文の意味に近く、この構文を必要としない(8b)。break/cut 系動詞は y の変化を特定するので、この構文の認知構造とは矛盾する(9)。

(8) a. John had a kick of the football.³

b. *John had a touch of the cat.

(9) a. *John had a break of the windows.

b. *John had a cut of the cake.

一方、中間構文の認知構造では、変化の部分が際立つため(中村 1993 : 261)、変化に言及しない touch 系動詞はこの構文に現れず(10b)、cut 系動詞は現れる(11b)。このこともそれぞれの認知構造から正しく予測される。

- (10) a. They touched the wire.
 b. *The wire touches easily.
- (11) a. They cut the bread (with this knife)
 b. The bread cuts easily.
 (cf. *The door kicks easily./The glass breaks easily.)

4. 拡張構文の認知構造

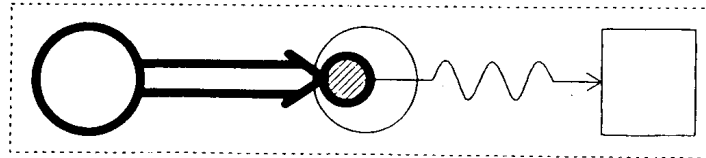
x touch/kick/break/cut y 構文の認知構造に基づいて、特殊な拡張構文の認知構造を推定することも可能になる。所有者上昇構文（次のb文）は拡張構文と見なすことができるが、touch/kick/break/cut 系動詞のうち、break 系動詞はこの構文に現れない。

- (12) a. John touched Mary's ear.
 b. John touched Mary on the ear.
- (13) a. John kicked the dog's leg.
 b. John kicked the dog on the leg.
- (14) a. John broke Bill's leg.
 b. *John broke Bill on/in the leg.
- (15) a. John cut Bill's arm.
 b. John cut Bill on the arm. (Laughren, Levin and Rappaport 1986)

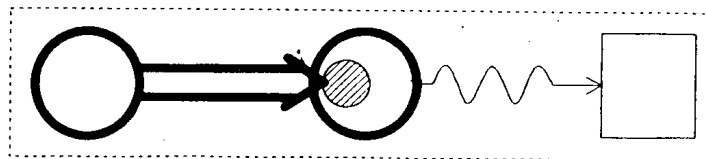
所有者上昇構文の意味的特徴として、「主語が目的語にある種の感情を抱いている」（例えば、The Prime Minister kissed the Queen on the hand. は、He kissed the Queen's hand. とは違って、単なる挨拶のキスではなく、首相が女王に気がある感じが出るので、このコンテキストではこの構文は不適）ということがよく指摘される。しかし、これだけでは、break 系動詞がこの構文に現れないことの説明にはならない。この構文に共通に現れる touch/kick/cut と、この構文に現れない break の認知構造を比較すると、興味深い事実が見えてくる。まず、break の場合、x がどのようにして y を割るかは問題ではなく、x は y に接触しなくてもよい（例えば、テーブルを傾けて花瓶を落として割る場合など。）しかし、他の動詞の場合、x が y にどのような働きかけをするかを描く動詞であるため、実際の動きに関与する部分（実動部）が想起され、x と y の実動部は接触している⁴。x kick y の場合、x 全体が y

全体を蹴るのではなく、x の足が動いて y の体表の一部に当たるという事態であり、x touch y では、通常 x の手が y の体表の一部に触れる。x cut y では、x のもつ刃物が y に向かい、その表面から入って切ってゆくという具合である。このように、x touch/kick/cut y では、それぞれに特有の実動部があり、しかも、重要な点は、x の実動部と y の実動部が接触するという点である。これらの3種の動詞が所有者上昇構文に現れ、break 系動詞が現れないことから、この構文は、所有者を目的語で表し、x と接触する y の実動部を前置詞句 (eg. on the leg) で表す構文であると言えることができる。この構文 (x kick y on the part) の認知構造は、x kick y's part 構文の認知構造と対照させ、次のように提示することができる (part は、身体部位)。

(16) a. x kick y's part.



b. x kick y on the part.



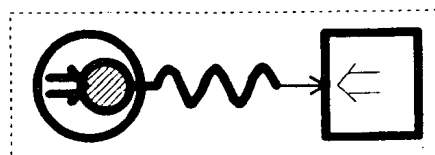
円yの中の、斜線を施した小円は、x と接触する y の実動部である。(16a)の場合、目的語は y の実動部 (身体の一部) であるから、その部分が太線で示され、x からこの部分へ二重線の矢印が向かい、変化を表す波線矢印もこの部分から出る。(ここで x 内の実動部は便宜上表示しないが、表示するとすれば、言語化されていないので、細線で囲まれることになる。) 一方、(16b)の所有者上昇構文では、y が目的語だから、y の円は太線で表され、x の力はこの y に向かい、さらに前置詞句で表されている実動部まで届く。この場合、変化が予測されるのは目的語の y だから、波線矢印は y から出る。この認知構造から、x と y の実動部とその接触を表わさない break がこの構文に現れないことが理解できる。

実動部 (特に x の) が関与していながら、それが言語化されない構文のあることを見たが、主語 x の実動部 (身体部位・道具) を目的語で表す構文に次の b 文のような例がある。この構文は kick 系の動詞しか許さない。

- (17) a. I touched the cat.
 b. *I touched my hand against the cat.
- (18) a. I kicked the wall.
 b. I kicked my left leg against the wall.
 (cf. I hit the bat against the wall.)
- (19) a. I broke the egg.
 b. *I broke a spoon against the egg.
- (20) a. I cut the bread.
 b. *I cut the knife against the bread.

この構文は、主語の身体部位（または道具）に力を加えて（素早く）動かしていたところ、その部位が偶然ある対象にぶつかったということを描く構文である。break/cut は、目的語の状態の変化を前提としているため、目的語（spoon や knife）の状態変化を表さないこの構文には適さない。touch はもともと移動を含まないので、目的語（x の実動部）の移動を表すこの構文には不向きというわけである。この構文では、against の目的語（の指示物 the wall）は変化しないし、もともと話し手もこれを変化させようというつもりはないから、前置詞句で表されている。もし、話し手が最初からこれを変化させるつもりで蹴っていれば、この the wall は目的語で表され、I kicked the wall with my left leg. という表現になるはずである。このような点を考慮すると、この構文の認知構造は次のように表示される。

- (21) x kick/hit y (=x's part) against z (cf. I hit the bat against the wall.)



目的語 y は、x の所有する実動部（足やバット）であるから、x が力を加える対象は、x 自らの円内にある小円（実動部）であり、それが力を加えられ移動し、against の目的語（四角で示される）に衝突する。against の目的語がその衝撃に影響されず変化しない（と話し手が判断している）ことは、四角の中の左向きの矢印（反作用を表す）によって示される。この構文の統語構造は、結果構文の x kicked the ball toward the wall（x がボールに力を加え、そ

のボールを壁の方へ移動させる)と同じであり、また、どちらの認知構造も《使役》の認知構造をベースにしている点で共通している。しかし、この構文は、目的語が主語の実動部であって、主語が自らの所有する身体部位や道具(実動部)に力を加えて動かしている(という通常意識されない)部分が際立つという特殊性があり、一般的な結果構文からの拡張であると考えられる。

実動部が目的語として表現されることの特殊性に触れたが、これには段階性がある、次の(22b)のような場合は、それほど特殊とは感じられない。

- (22) a. I raised a flag.
b. I raised my hand.

(22a)で、旗を上げるとき通常手を使うから、この表現には明示されない実動部が関与していることになる。その実動部を行為の対象として、目的語で表したのが(b)である。この表現がそれほど特殊という感じを与えないのは、raiseがbreak系動詞であって、kick系動詞とは違い、力の伝達過程を際立たせる動詞ではないためであろう⁵。

walkやrunなどの自動詞も、通常足がその実動部として関与している。自動詞ではあるが、行為者は自らの足(実動部)に力を加え動かし、移動しているわけである。通常意識されることのない自分の足への力が注目され際立つと、表現としてつぎのような構文が可能になる。

- (23) I walked my legs sore.

この構文では、主語の実動部が自動詞の目的語(!)として表現されている。これも一般的な結果構文の影響、あるいは拡張であると思われるが、「歩く」という自動詞的行為が「足を動かして自らを移動させる」という具合に使役的に捉え直されて、このような構文が可能になるのであろう。この種の表現が不可能な独仏伊語に対して、英語は、外界の事象を使役的に捉え直す傾向の強い言語と言えるかもしれない。これは、構文の認知構造ネットワークの観点からすると、英語が《使役》の認知構造をベースにして構文の拡張をしていく言語である、という点から捉えることができる。(cf. 中村 1993: 257-60, 265)

このような使役的捉え直しは、再起中間構文(reflexive middle construc-

tion) にも見られる (大文字は強勢を表す)。

- (24) a. The gears on my new bike shift THEMSELVES.
b. Honda-the car that sells ITSELF. (Fellbaum 1989)

この構文は、目的語に強勢をもつ再帰代名詞をとり、中間構文と同じように状態的・習慣的意味になる。この構文の意味構造の詳細は明らかにされていないが、touch/kick/break/cut の容認度からその認知構造を推定することができる。通常の間接構文は、既に 3 で見たように上の 4 つの動詞系のうち、break/cut 系動詞をとるが(中村1993:261)、この構文がとるのは break 系動詞のみである。

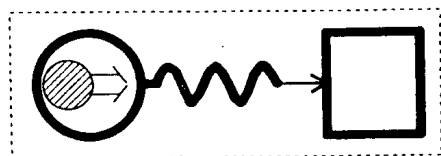
- (25) a. Weathered rocks break THEMSELVES. (cf. The rocks break easily.)
b. *Soft wood cuts ITSELF. (cf. Soft wood cuts easily.)

open や close も break 系動詞なので、この構文に現れる。

- (26) This door opens/closes ITSELF.

この構文が break 系動詞しかとらないということは、基本的に、この構文は変化だけを表す構文だといってよい。つまり、能格構文の表すような事態を表すと考えてよい。また、この構文の場合、その事態を引き起こす主語、例えば (25a) の岩や (26) のドアなどでは、その内在的性質 (もろさ) や作り付けのよさなどが、まるでそれらが原因で岩が割れたり、ドアが開いたりするかのようには解釈され、使役的な力として捉え直されているということが出来る。この内在的な性質を実動部とすると、この実動部が自らに働きかけて変化しているかのように見なされているわけである。この実動部は y に属し、 y の変化を引き起こす根源であるから、その y への働きかけが再帰代名詞の使用を可能にしていると思われる。以上の点と、実動部が不特定で、その存在が推測される程度である、ということを考慮すると、その認知構造は次のようになる。 y 内の不特定の実動部からの働きかけは具体的なものではないので、 y 内の小円 ($=x$) から y への二重線矢印は細線で示されている。

- (27) y break/open/close ITSELF.



この構文で, y が自ら作動しているように感じられるのは, 不特定の内部からの働きかけによって, y が変化しているためである。(また, この構文が, 中間構文同様, 状態的続きしか許さないのは, 左端の円 (ここでは y 内の円) を占める使役者が不特定であるためである。) 興味深いことに, x 内の性質が特定されると, その事態は, make 使役構文による表現が可能となる。

- (28) Weathering makes rocks break.

これは, 再起中間構文では, 不特定の y 内部の性質や仕組みが, 使役的要素であることを示唆している。

(27)の認知構造をもとにすると, 再起中間構文に現れる動詞は break 系動詞でなくてもよいのではないか。つまり, 力の移動過程を特定しないようなある種の変化があり, 変化するモノにその変化を起こす性質 (使役者) が内在していると感じられれば, この構文による表現が可能になるのではないかとされる。実際その通りで, 例えば, write という動詞は通常この構文に現れにくい (cf. 29a), (29b) のように, 主語の変化 (書かれていない状態から書かれた状態への変化) を引き起こす内在的使役者が強く感じられるようにすると容認度が高くなる。

- (29) a. ? A story writes ITSELF.
 b. A good story, once clearly conceived, almost writes ITSELF.
 (29b は, 例文のみ山田(1994))

(24 a) の shift は break 系動詞であるから問題ないが, (24b) の sell や以下の例に見られる動詞が break 系動詞でなくてもこの構文に現れるのは, 変化を引き起こす内在的使役者が感じられやすいからだと言える。

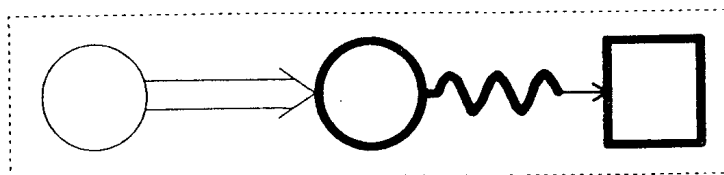
- (30) a. Bureaucrats bribe THEMSELVES.
 b. These problems solve THEMSELVES.

c. This condo pays for ITSELF. (Fellbaum 1989)

(30a)は総称文であるが、官僚システムに内在している収賄の体質は容易に予測できるし、(30)(a)(b)の場合でも、問題によってはすでに解決を内在させているものがあること、マンションによってはその魅力のためにすぐにもとを取りもどすことなどが容易に想像される。

ここで、再起中間構文と通常の中間構文の認知構造を比較してみよう。中間構文の認知構造は次のように示される（中村 1993：261）。

(31) x cut easily.



両構文ともに、《使役》の認知構造をベースとする拡張構文であるが、中間構文の場合、変化を引き起こす使役的力は外部より発し、再起中間構文では、その力は主語の内部に発する点で対照的である。その具体的な読みの差は、次の例で顕著である。

(32) a. This car sells well.

b. This car sells ITSELF.

中間構文 (32a) の読みは、「だれかがその車を売ろうとすると、よく売れる」となり、再起中間構文 (32b) の読みは「その車はなんらかの魅力ゆえにひとりでのように売れていく」となる。また、どちらも状态的・習慣的読みになるのは、両構文の、外的・内的な使役者が不特定であるためである。

この節では、x touch/kick/break/cut y 構文の認知構造から、拡張構文の意味構造を推定するという作業を続けてきたが、構文やその意味構造の分析は不必要だとする議論もある。とりわけ話彙意味論では、語彙の意味記述だけで十分であり、構文分析とその意味記述は不必要とする。例えば、open という動詞がどのような項をとり、どのような意味を表すかを記述しておけば、それがどのような構文に現れるかは自動的に決定され、意味も明示されるわけである。しかし、基本的にある構文に現れない動詞が、コンテキスト次第でその構文に現れるようになる場合は、語彙意味論のような立場では対

処できない。つまり、ある動詞が、特定の構文に現れないことがすでに記述されていると、その構文に当該動詞が現れた場合は、常に非文とされるからである。しかし、われわれの立場のように、構文がある一定の事態を表すという立場をとると、この問題に十分対処できる。つまり、構文の認知構造を同定しておくことによって、通常その構文に現れない語彙（例えば (29a) の write) が、文脈によってその語彙が当該構文に表れるようになる場合などは (29b), 当該構文の認知構造と近似の意味構造が文脈によって生じたために、当該構文による表現が可能になったという説明が可能になる。また、中間構文に表れない kick が、My new steel-tipped boots kicks well. という例で可能になるのも、この表現の解釈が典型的な中間構文の認知構造に近似するためであって、この場合も構文の認知構造を立てておくことによって説明が可能になる。このように、構文とその認知構造を認めることによって、通常現れない語彙が、適切なコンテキストの設定によって、特定の構文に現れるようになる現象が説明できるだけでなく、同時に、語彙の用法拡張過程についても説明の視角を与えてくれる。

5. 認知構造ネットワーク（部分）の精緻化

中村（1993）の全体的ネットワークにおいて、下方へ展開した部分（の一部）、つまり kick/break 系動詞の構文ネットワークが、ここで同定された構文の認知構造によって幾分か細かになり、豊かになったと思われるので、kick/break 系動詞構文とその周辺のネットワークをあらためて提示することにする（14～15ページ）。ネットワークのこの部分に新たに追加したのは次の構文である。

- (33) a. x touch y
 b. x cut y
 c. x {touch/kick/cut} y on the (=y's) part
 d. x kick y (=x's part) against z
 e. x break ITSELF.

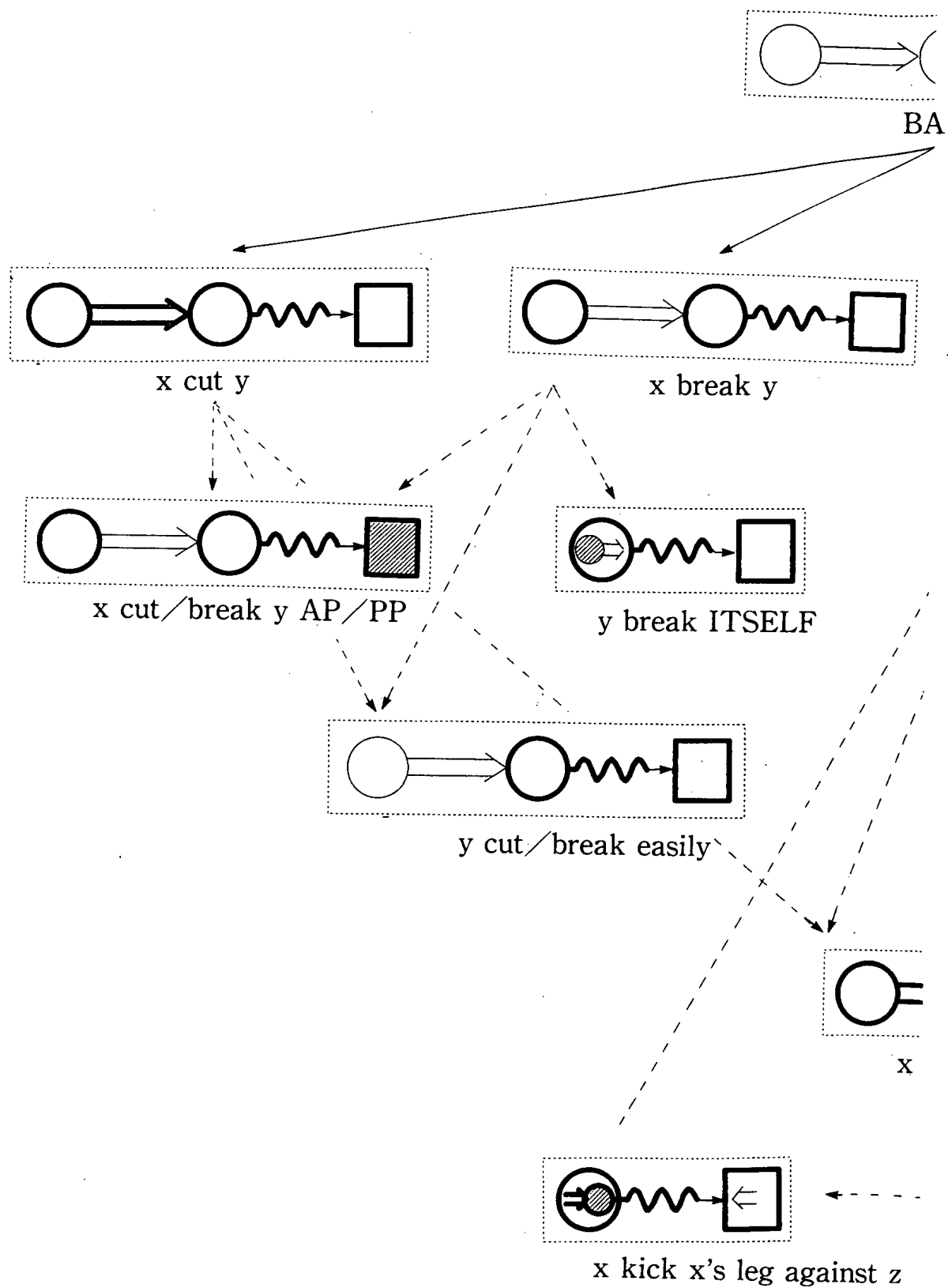
まず、4種の動詞系基本構文が、ベースとなる《使役》の認知構造の各部を際立たせながら、この認知構造を具現化する。次に、各動詞系の x verb y 構文の認知構造から、さらに認知的に可能な際立ちと認知スコープの取り方をもつ構文が拡張する。例えば、x have a kick of y に代表される x have a

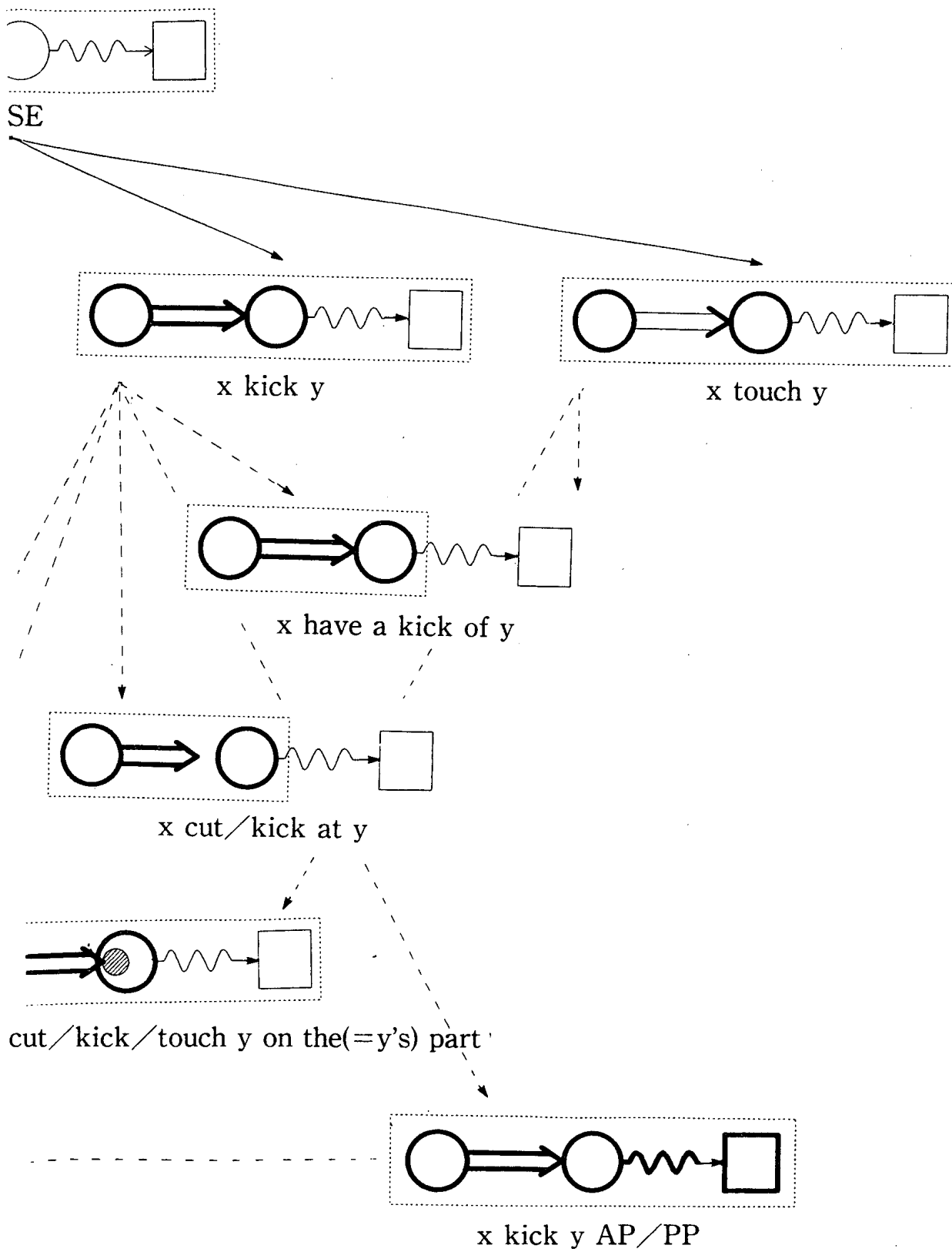
V of y 構文の認知構造は、x kick y の認知スコープから、変化の部分を除くような形で拡張していると言える。具体的には、x kick a football では、y の変化が意識されるが、x have a kick of a football では、ボールをあるものに目がけて蹴るという目的意識はなく、蹴ることをひたすら楽しむというような自動詞的事態が表される。また、x kick y (=x's part) against z 構文にしても、既に述べたように、通常は「注意の焦点」にならないような部分、すなわち、自分が自分の手足に力を入れているところが、認知的捉え直しによって焦点化され、それを表現する構文として（結果構文の影響も受けながら）拡張していると言える。

6. 結 語

構文の意味記述は、その構文の統語的特性をも余すところなく予測するものでなければならないが、一つの構文の意味構造を諸構文の意味構造のネットワークの中に位置付けることによって、構文というものが一体何なのか、また特定の言語の諸構文が全体として何を表現しようとしているかを捉える一つのパースペクティブを与えてくれる。次ページのネットワークは可能な一つのネットワークであるが、これをもとにすると次のようなことが予測できる。まず、英語の X transitive verb Y 構文は、基本的に《使役》の事態をベースにして、各動詞群はそのどの部分を際立たせるかで異なるということ。さらに、X transitive verb Y を基本構文とすると、その他の構文（拡張構文）は、基本構文では表せない、新たな認知スコープの取り方と際立ちの仕方を表現するのであって、何か全く新しい意味内容を表現するのではないということ。つまり、言語の豊かな表現力の一面は、語彙（的基本構文）と拡張構文という2段構えのシステムによって保たれているということである。構文は、しかし、あらゆる方向に無限に拡張することが許されているのではなく、ベースとする認知構造の許容する際立たせ方と認知スコープの取り方に強く制限されているということが出来る。このような点についてより厳密な予測を行い、認知論的類型論の基盤とすることも可能であるが、全体的で綿密なネットワーク作りとともにそれは今後の課題である。重要なことは、構文の妥当な意味記述には、単一構文の緻密な分析に向かうミクロ的視点と諸構文の全体像解明に向かうマクロ的視点とが必要だということである。

A NETWORK OF COGNITIVE STRUCTURES FOR GRAMMATICAL CONSTRUCTIONS





注

1. 言語表現の意味構造について、それをニューロンの活動 (neural firing) にまで還元することに異論はあまり見られないが、意味構造の重要なレベルとしてイメージのレベルを設けることについては解決しておくべき問題が2つある。一つは、(i)イメージなるものが存在するかどうか。イメージの存在は自明のようで実はそれほど自明のことではない。もう一つの問題は、(ii)イメージが存在するとしても、言語表現の意味はそのイメージと同じものかどうか、という問題である。

第一の問題については、例えば Jackendoff (1993: 187) はイメージの存在を認めないが、Langacker (1987, 1991 など) は積極的にこれを認め、イメージ図による意味表示を積極的に推し進めている。心理学では、イメージの客観的存在を主張する Kosslyn と計算理論によってイメージ不在説を主張する Pylyshyn との論争があるが、ここでは、次のようにまとめられる Kosslyn の立場をとることにする。

60年代から70年代にかけて、心的回転をはじめとしたさまざまなイメージ課題が開発され、実験的証拠が蓄積されてきた結果、イメージを実験的操作によって証明される仮説的構成概念であると考えた段階を越えて、外界の事物に対応して、心の中にも絵のような「表象形式」が存在し、これがイメージの本質的に重要な部分であるとみなすようになった。そしてイメージの表象形式に関する議論が、イメージに対して絵のような表象を仮定するペイヴィオ、コスリン (Kosslyn, S. M.) らと、いっさい絵的なものは否定し、命題とよばれる抽象的な表象形式のみを仮定するピリシン (Pylyshyn, 1973) との間で闘わされたが、その帰結はコスリン (1980) にみられるように、両者を折衷し、コンピュータの CTR 上の映像のような絵的なものと、それを支えるコンピュータプログラムのような抽象的な表象形式を仮定するというものである。そして、イメージに伴う主観的印象は前者に伴うものであるというものである。さらに、この絵のようなものは、抽象的表象の単なる付帯現象ではなく、さまざまな変換を行い、抽象的表象の力を借りて解釈を行い、それを抽象的表象として蓄えることができる。すなわち、絵的なものと抽象的な表象の間に絶え間ない交互作用が仮定されている。(箱田編著『イメージング』p.9.)

また、言語学的観点からも、アルゴリズム記述の可能なニューロンの活動に

よる表示に加えてイメージによる表示が必要であることを示すことができる。例えば「怒り (anger)」の意味表示を考えてみよう。どのようなニューロンがどのような発火をするかというところまで還元しなくても、次の戸田 (1992) のような怒りの分析、また semantic primitives ('do' 'feel' 'think' 'want' 'good' 'bad' など) による Wierzbicka の分析などは、十分根源的な怒り (anger) の分析であろうと思われる。

動物の「怒り」、すなわち縄張り防衛者の行動の背後にある動物の心の仕組みを「原怒り」とすると、人間の怒りについては、その起動条件は、権限的縄張りの侵害である、ということができる。(戸田『感情』 p.12)

x is angry at y :
 x thinks something like this :
 this person (y) did something bad
 I don't want this
 because of this, x feels something bad to this person
 because of this, x want to do something (Wierzbicka 1992 : 141)

しかし、怒りの際のニューロン活動を示しても、またこのような根源的分析を示しても、われわれが、なぜ怒りに対して「カッカする」とか「はらわたが煮えくりかえる」というような熱と関わる言語表現をするのか。英語でも、同じようになぜ次のような表現をするのかは、このような分析からは説明できないだろう。

You make my blood boil. (俺の血を煮えたぎらせる)
 Simmer down. (熱を冷やせ)
 I had reached the boiling point. (沸騰点に達していた)
 Let him stew. (しばらく弱火にかけさせておけ) (Lakoff 1987 : 383)

Lakoff が強く主張するように、あるレベルで、怒りをイメージで捉えている、例えば「容器の中の液体の熱 (heat of fluid in a container)」というイメージ (厳密にはイメージ・スキーマ) で捉えている、とすると、このような表現がこのイメージをもとに生じているということが自然に説明できる。言語表現の意味表示には2つのレベル (すなわち、ニューロンの活動とイ

メージのレベル) が必要だというわけである。

(ii)の問題, すなわち, イメージが存在するとした場合, 言語表現の意味表示として用いられるイメージは厳密にはどのようなものか, 常識的なイメージと同じと見なしてよいのかどうか, については, Barsalou et al. (1993)の問題提起があるが, ここでは, Langacker に従い, 人間に認められるさまざまな認知能力と関連する諸特性をもつイメージとしておく。

2. この図は基本的に Langacker (1987, 1991) に基づいているが, 変化の部分を Langacker のように 2 番目の円内に表示するよりも, ここでのようにその円の外, 右側に示した方が, 構文の認知構造間の関連性をうまく捉えることができる。

3. *x have a kick of y* は常に可能というわけではなく, 次のような例の容認度は低い。

* John had a kick of his detestable cousin. (Wierzbicka 1988 : 323)

このような場面では, 通常 John には, his detestable cousin を蹴って何らかの状態にしようという意図があるし, また, この cousin も蹴られれば何らかの変化を被ることは必定であるから, このような場面は, 主語の意図と被行為者の変化を表さない *have a V* 構文には適さない。

4. 実動部は, Langacker (1987, 1993) の active zone と共通する概念である。Langacker (1993) は, 次のような文でも active zone が活性化されるとする。

- a. Zelda heard a trombone.
- b. I'm in the phone book.
- c. Zelda began a novel.

(a)では, trombone の「音」が active zone として活性化され, (b)では, I の「電話番号」が, (c)では, 始めたのが「読むこと」であったり「書くこと」であったりすることが, active zone として活性化される。このような例文では実動部も active zone も同じ概念であるが, 実動部という概念は, もっと広

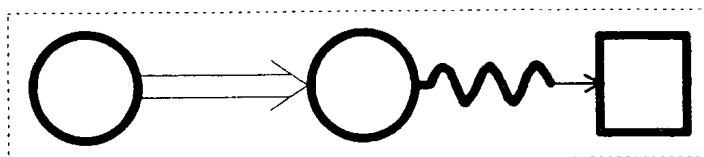
く適用しようと考えている。次の文で、

d. I cut a finger.

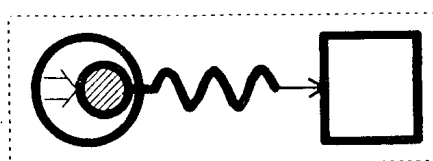
その合成的意味は、「わたしは一本の指を折った」ということであるが、実際は、その指は主語の（私の）指と解釈される。このような解釈も意味解釈における実動部と見なしたい。

5. x raise y と x raise x's hand の認知構造は、それぞれ次の(a)(b)のようになる。

a. x raise y.



b. x raise x's hand.



(b)では、目的語の hand は、主語の所有するものであるから、x からの矢印（力）は、その内部の小円（hand）に向かい、それが変化する。

REFERENCES

- Barsalou, W. Lawrence; Wenchu Yeh; Barbara J. Junka; Karen L. Olseth; Kelly S. Mix and Ling - Ling Wu. 1993. Concepts and meaning. CLS 29, vol.2. 23-61.
- Fellbaum, C. 1989. On the 'reflexive middle' in English. CLS 25. 123-32.
- Jackendoff, Ray. 1993. Patterns in mind. London: Harvester.
- Kosslyn, S. M. 1980. Image and mind. Cambridge, Mass.: Harvard Univ. Press.
- Lakoff, George. 1987. Women, fire and dangerous things. Chicago: Univ. of Chicago Press. (池上・河上他訳『認知意味論』紀伊國屋)
- Langacker, Ronald W. 1987/1991. Foundations of cognitive grammar. Vols. I and II. Stanford: Stanford University Press
- _____. 1993. Reference - point construction. Cognitive linguistics 4. 1-37.
- Levin, Beth. 1993. English verb classes and alterations. Chicago: Univ. of Chicago

- Press.
- _____. and Malka Rappaport. 1988. Nonevent -er nominals: A probe into argument structure," *Linguistics* 26, 1067-1083.
- Pylyshyn, Zenon W. 1984. *Computation and cognition: Toward a foundation for cognitive science*. Cambridge, Masa. :MIT. (佐伯 胖監訳『認知科学の計算理論』産業図書)
- Wierzbicka, Anna. 1988. *The semantics of grammar*. Amsterdam: John Benjamins.
- _____. 1992. *Semantics, culture and cognition*. Oxford: Oxford Univ. Press.
- 中村芳久 1993 「構文の認知構造ネットワーク」福岡言語学研究会編『言語学からの眺望』九州大学出版会. 274-268.
- 箱田裕司 編著 1991 『イメージング』サイエンス社.
- 戸田正直 1992 『感情』東京大学出版会.
- 山田佳子 1994 「再起代名詞を伴う中間動詞構文」第12回日本英語学会 口頭発表.